

# インドネシア文化理解 西祥郎著

## 目次

1. 文化ビヘイビア .....	2
2. ふるまい (1).....	4
3. ふるまい (2).....	6
4. 会話・対話.....	9
5. 社交ビヘイビア(1).....	10
6. 社交ビヘイビア(2).....	13
7. 社交ビヘイビア(3).....	14
8. 時間と金銭の観念 (1).....	16
9. 時間と金銭の観念 (2).....	18
10. 時間と金銭の観念 (3).....	20
11. 人間像.....	22
12. 社会生活原理 (1).....	23
13. 社会生活原理 (2).....	25
14. 社会生活原理 (3).....	27
15. 社会生活原理 (4).....	29
16. 社会生活原理 (5).....	31
17. 社会生活原理 (6).....	32

### 【註】

脚注は全て編者が付けたものである。

## インドネシア文化理解 西祥郎著

### 「インドネシア文化理解(1)」(2023年10月23日)

言語教育畑を歩んでインドネシアの教育者たちを育てたサットノ教授はマラン教育大学の学長を務めてから第一線を退いた。かれの著作「言葉の鬼とクロスカルチャー理解」と題する2003年に出版された書物には、人間の文化ビヘイビアはこんなに異なっているのだという豊富な例が記されている。

面白い内容がいろいろ書かれているので、今回それをご紹介しますことにしたい。もちろん人間のビヘイビアは時代の推移に伴って変化する可能性を持っていることを追記しておこうと思う。人間のビヘイビアの中で文化によって違っているものがあるのは、ある時期にある根拠や理由によってある環境の中にそれが発現してその文化の中で伝統化したためだろうから、ユニバーサルな人間性よりも風土や環境からの影響を強く受けたことが原因で起こった現象のように思われる。

風土や環境が異なるがために別の文化ではそうならないで別の発現形態を執ったものを並べて比較しているのがクロスカルチャー理解というものなのだろう。しかしそんな文化行動の違いを育んだ風土や環境も時代の変化にともなって、いくら伝統化したとはいえながらも発端時の根拠や理由が持っていた社会生活における価値が変化すればその影響を蒙らないないはずがないとわたしは思う。

おまけに世界的に優勢な文化に弱小の民が追随してファッション化させることも頻繁に起こっているわけだから、XX人がそんなビヘイビアをすればこんな意味になるのだというべた一面の解釈はリスクをはらんでいることが懸念される。大傾向が意味しているものと個別のケースが常に一致するとは限らないのがこの世界の常識ではないだろうか。

サットノ教授が書物の中で述べた文は(♪)の記号を付けて引用した。(♪)記号は教授でなくて本論筆者の個人的な意見なので、念の為。

(♪) 手を使って何かを指し示す場合、指を伸ばして使うことがよく行われる。ジョクジャやソロでは親指が使われる。だが米国人にとって、指を伸ばして他人に向けるのはスラバヤ人が頻繁に口にする罵詈を意味しているのだ。だから指を伸ばして指し示すのではなく、指を全部開いた平手を使

って、その指先で指し示すのがもっとも無難な所作だろう。

- (J) ジャワ文化では、客に座る場所を示す場合には、身体を前に傾け、右手を握って親指を伸ばし、左手を右手に添えて親指の指先で指し示す
- (J) インドネシア人は他人や子供を招き寄せるために手を開いて全体を上下に動かす。ところが米国人は同じしぐさで「さよなら」を表明する。米国人が親指と人差し指で丸を作ればオッケーの意味。しかしメキシコやブラジルでは卑猥な意味になる。
- (J) 頭を振るしぐさは、たいていの文化でノーを意味している。ところがインド人はそのしぐさでイエスを表現する。ブルガリアとトルコでは頭を振る方向が違って、後ろに向かって頭を振るのがノーを表明するしぐさだ。
- (J) 椅子に座って脚を組む姿勢は、ジャワ文化では行儀の悪い姿とされている。女性の座姿勢は必ず腿を合わせなければならない。しかしブギス＝マカッサルでは、サロンを履いているかぎり行儀が悪いとは見なされない。
- (JJ) 腿を合わせる座姿勢を床に座って行う場合、まったく同一ではないが日本の正座のような形になる。ジャワ女性も正座に似た座姿勢を執るのである。ガムランの伴奏で唄う女性プシンデンの座姿勢を見るとそれが判る。もちろん、一般庶民の中には男のように胡坐をかいて腿を広げる女性もいる<sup>1</sup>。

[ 続く ]

---

<sup>1</sup> 女性の胡坐姿は今まで二十数カ国で仕事をしたがあまり見かけなかった。日本とインドネシアは言うまでもなく床上生活を送っているベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーでもそうであった。多分女性器が床に直接あたると色々な問題が出てくるからだろう。

## 「インドネシア文化理解(2)」(2023年10月24日)

- (J) 挨拶としての接吻は、アラブとロシアでは男同士がパブリックスペースで唇を合わせる<sup>2</sup>。米国では女同士が挨拶として唇を合わせる。米国の男女はお互いが気に入ればパブリックスペースでどンドン唇を合わせる。
- (JJ) イスラムという共通項を持っていても、インドネシア文化とアラブ文化は違っている。男同士の挨拶として、ハグして頬を合わせることまではしても唇を合わせようとするインドネシア人男性はまずいないだろう。男に抱きつかれるのは死んでも嫌だという異文化の男性は、相手が抱きつこうとしたら自分の両手を胸の前で合わせて合掌し、顔をうつむかせると抱き付きアタックをビューティフルにかわせるのではあるまいか。抱き付きアタックから逃れようとしてじたばたする姿は挨拶をぶち壊しているようでどうにも見苦しい。合掌は生きている人間同士の挨拶にも使われるものだ。それを死者との挨拶だけにしてしまった文化はもっと柔軟さを取り戻すべきではあるまいか。
- 3
- (J) 対人接触の際の目の位置について、米国人は会話するときに相手を見つめる。目をそらすと、「馬鹿にしている」「真剣でない」「信用できない」といった印象が生じる。しかしジャワ文化では、親や目上のひとに話すときは下を見るのが礼儀になっている。下位者が上位者の目を見て話すと、挑戦的という印象が生じる。<sup>4</sup>
- (JJ) 獐猛なケダモノと目を合わせてはいけないということがよく言われている。目を合わせるとそのケダモノが襲いかかって来るのだそうだ。つまりは目を合わせた人間が自分に挑戦しているという解釈をケダモノがするのだろう。えっ、じゃあジャワ文化はケダモノ文化に似ている！？それとも

---

<sup>2</sup> これは例外的だろう。今まで数年間滞在中東地域では男同士は毛むくじらの頬に頬を当てるだけでチュッと音を出していただけだった。

<sup>3</sup> 肌の接触を好むと好まざるはその民族の皮膚の厚さによるものではないだろうか。女性や子供は肌が薄いから接触を好む。ちなみにアラブ人は皮膚が薄くて日焼けしやすいのでその対策として民族服がある。

<sup>4</sup> 子供を叱るときにはしっかりと子供の目を見る。叱られる子供は叱る人の目をしっかりと見て「ちゃんと聞いています」という態度を明確にする。仕事上の会議の席でも相手をしっかりと見る。この教授はどこを見ているのだろうか？付き合っている人たちが編者と異なっているのだろうか。

西洋人は四六時中癡猛な挑戦的姿勢で人生を生きているということなのだろうか？

- (J) 対人接触の際には米国人もインドネシア人も、いつもスマイルを顔に浮かべてフレンドリーな態度を示す。ところが東ヨーロッパに行くと、ひとびとは家族や親しい人間に対してだけスマイル顔を見せる。はじめて会った人間や、知人だけど別段親しいわけではない人間に対してニコニコ顔をして見せると、「下心がある」「相手に干渉したり、言いがかりをつけたいんだ」「頭がおかしいんじゃないの」といった解釈がなされる。
- (JJ) わたしはかつて部下のジャワ人女子社員から、公共スペースでスマイルを顔に浮かべるのは社会交際におけるエチケットなのだという話を聞いた。かの女は親からそういうしつけを受けたのだそうだ。そのためにそれは一種の条件反射のようなものとしてインドネシア人の社会生活における態度の中にしみついたものになっているのだろう。会社の中では現地人社員がみんな微笑みながら快活に振舞っていて、自然と楽しい環境が醸成されている。ところがいつもそうやって振舞っている女子社員のひとりを街中のバス停で見かけたことがあった。そのバス停にいたのはかの女ただひとりであり、わたしは自分で運転している車の中からそれを見たのだが、そのときのかの女のブスツとした表情を目にして、会社で見る普段の姿との落差に驚いたことがある。インドネシア人はスマイル民族だと語る声が多いようだが、見せかけの姿に踊らされているということはないだろうか。<sup>5</sup>
- (J) 対人接触時に日本人が笑う場合は、失敗や自分の非をごまかそうとしているのである。インドネシア人も同じようなことをする。日本人女性が笑うときは、手で口を覆い隠す。昔のジャワ女性も同じことをした。
- (JJ) 相手を笑わすための冗談に反応しているのではなくて、普通の会話の中で日本人が笑うのは「笑ってごまかす日本人」を実演しているのだろう。昔の西洋人が「Japanese smile」と言って忌み嫌った日本人のスマイルも真意真相を隠しごまかすための擬態だった。態度変われど本質は変わら

<sup>5</sup> ベトナムのホーチミン市にあった「ドラえもんカカ」という店には、「ベトナム人がほほ笑んだらその裏に必ず彼らの悪だくみがあるから注意せよ」という注意書きがあった。東南アジア諸国で微笑みが少ないのはベトナムだけだった。

ふるまい

ずということだろうか。

- (J) 昔のジャワ女性は、大声で話してはならず、またゲラゲラと大声で笑うのもいけないことだと教えられた。ゲラゲラカラカラと笑うのは売笑婦のすることなのだ。中国人はレストランで、美味しい料理を楽しんでいることを表明するために大声で会話することが期待されている。しかし米国でそれをしてはいけない。

[ 続く ]

### 「インドネシア文化理解(3)」(2023年10月25日)

- (J) 右手と左手の実用性に関しては、インドネシア人もアラブ人も右手を使う。
- (JJ) 左右の手に異なる役割が与えられ、長い歴史の中で、パブリックスペースにおいては右手を使うことが社会倫理にまで高められた。右手は善い手綺麗な手であり、左手は不浄の手という公理がその慣習の基本理解になっている。わたしはそれが衛生観念に端を発した使い分けであると解釈している<sup>6</sup>。人間の身体から出て来たり自然界に転がっている汚物の取扱いと、人間の身体に摂取されるものや人体の大切な部位に触れるのに使われる手は分離させたほうがよいというのが根本原因だったのではないだろうか。この見解から得られるのは左右ふたつある手の一方を汚穢取扱い専用にするだけであり、右手がどちらでなければならぬかという話は別のストーリーになるはずだ。普通一般の人間にとっては、汚穢でないものを取り扱う頻度のほうが圧倒的に高かったはずであり、自然生理学的に右利きの人間が多ければ左手が汚穢に回されるのが当然だったように思われる。だから、右の肩には天使が乗り左の肩に悪魔が乗るといふ言い伝えは左手が汚穢専用にした後で作られた観念であって、それが綺麗な右

---

<sup>6</sup> 石鹸もなかった昔の人はあまり手を洗わなかったからであろう。

手を慣習の中に作ったというのはどうも本末転倒なのではないかという気がするのである。とまれいずれにせよ、一部の文化においては右手左手の実用性が倫理にまで高められた。文化の中に作り上げられた倫理はたくさん人間がいろいろな原因理由を物語ってきたから、そんな中で唯一の真実を探しても無意味だろうし、結論も多分得られないのではあるまいか。

しつこいようだがもう一度本質論に戻るなら、汚穢を触るときには左手を専ら使うというのがそこにある原理であって、右手が綺麗専用などと言っているが本当はそんな定義を定める必要がなく、おまけに実態さえもがそうならないようにわたしには思われるのである。世の中にあるすべての創造物が汚穢と綺麗に二分されているわけではないのだ。どちらにも属さないニュートラルな物が山のようにある。だったら綺麗という言葉でなくて、汚穢と非汚穢というカテゴリーに分類するのが論理的科学的な態度だったのではないかという気がする。ところが「綺麗」「汚い」という対語に影響されて非科学的な表現が採用された結果、論理的におかしな概念が定着してしまった。言うまでもなく、言語とは本質的に非科学的なものなのだから。だからイスラム教徒が左手でアルクルアンを扱ったと言って目くじらを立てるには及ばないし、この文化ビヘイビアを持っている諸民族の台所では、だれもが左右の両手を使って料理し食べ物に触っているのが実態なのである。

- (J) 男性同士が手を握ったりつないだりする振舞いは、米国ではホモやゲイの行為と見なされる。
- (JJ) インドネシアで男同士の身体接触(もちろん性的な部位は論外)は自然なものと思われているようで、男同士が手をつなぐことはそれほど奇異な振舞いに該当せず、あまり意識されずに普通に行われている。そこだけを見て、米国的観念を基準に置いてインドネシアにはホモやゲイが多いと断定するのは歪んだクロスカルチャー理解にならないだろうか？<sup>7</sup>
- (J) おじぎはジャワ人もする。特に別れの挨拶で、頭を前に倒し、あるいは身体を前傾させるしぐさをするのは普通のふるまいだ。
- (JJ) 教授が述べている「別れ」というのは長期間の別離だけでなく、明日また会えたら人に対するし

<sup>7</sup> ホモやゲイを嫌うのは東アジア地域に多いように感じる。儒教の教えに影響されているのかもしれない。

ばしの別れの挨拶をも含んでおり、それどころか、ちょっと出かけてきますと息子が親に言う場合も含まれることがある。

(J) ジャワには、座っているひとの前を通る時の礼儀作法がある。身体をかがめて小さくなり、手を真下に伸ばして<sup>8</sup>nyuwun sewu と言う。高位者の前ではそれすらも行わず、遠回りをしてでもその前を横切らない。

(JJ) nyuwun は suwun の派生形で「お願い申し上げます」を意味している。また suwun の同義語である nuwun が使われて nuwun sewu と言うこともある。sewu はインドネシア語の seribu<sup>9</sup>だ。

(J) 人間の頭は聖なるものと考えられている。

(JJ) 過日バリ島のモールで、幼児を抱いたお母さんとその夫の三人連れがエスカレータで上の階に上がって来た。たまたまそこを西洋人の中年夫婦ふたりが通りかかり、幼児の顔を見て何か言いながらかわりばんこに頭を撫でた。幼児のお母さんはニコニコしていたがその夫の表情が一変し、憎々し気な顔つきで西洋人夫婦を睨みつけていた。これが教授の述べた項目の具体例かどうかわたしには確信がないものの、きっとまあ、たいていの人がそれを結び付けることだろう。あなたがインドネシア人の頭に触っていけないのは、あなたがそのインドネシア人にとって赤の他人だからだ。親子親族関係あるいは親友恋人関係にでもなれば、相手がインドネシア人であろうがなかろうがみんな自分の頭を相手に触らせている。

[ 続く ]

---

<sup>8</sup> これは腰巻文化によるものではないだろうか。日本でも和服を着ている時には手を前に出して「御免なさいよ」と着物の裾が相手に触れないようにする。接触感染を防ぐための昔からの知恵だろう。

<sup>9</sup> Seribu=1000。「沢山」を意味する。



## 「インドネシア文化理解(4)」(2023年10月26日)

- (J) 年齢・給料・買った品物の値段についての質問は、米国ではタブーとされているが、インドネシアでは自由だ。
- (J) ラテンアメリカやアラブでは親しくないひとと立ち話するときでも、お互いに相手に近寄って会話する。インドネシア人や米国人はあまり接近しない。インドネシア人が接近派文化のひとと立ち話すると往々にして居心地の悪い思いをする。自分のプライベート領域に赤の他人が侵入したような印象を感じるからだ。
- (JJ) 対人接触時の両者間の距離感覚、いわゆる対人距離はそのひとが持っているパーソナル感覚を示すものであり、その距離が形成する空間の中には自分とパーソナルな心理関係になった人間だけ受け入れることができ、そういう関係になっていないひとが入って来ると困惑や不快さが上昇する。個々人が持っている快適パーソナルスペースの広さは差異があるものの、文化全体がひとつの傾向を作り出すために、広いスペースの文化で育ったひとと狭いスペース文化で育ったひとが対面するとき、違和感が生じやすい。インドネシア人はパーソナルスペースが広いために、狭い文化のひとと立ち話するとき相手が必要以上に自分に近寄って来ると感じて居心地悪くなり、不快が発生する。自分のプライベートな空間に他人が土足で踏み込んだように感じるのだろう。
- (J) 会話の中で何かを依頼したり、同意を求めることがしばしば起こる。ところが多い文化で沈黙の回答が返されることも頻繁だ。米国人の沈黙回答は否定を意味している。依頼を受け付けない、同意しない、と沈黙が物語っているのだ。しかしイギリス人の場合は「多分ノーだろう」というソフトなものになる。イランでは、男に申し込まれたり誘われたりした女性が黙っているのは了承を意味するが、ジャワだと女性は沈黙で不承知を相手に告げる<sup>10</sup>。
- (J) 会話における語りの応酬にも文化の違いが見られる。東ヨーロッパではたいてい、相手が語り終

---

<sup>10</sup> ジャワ人男性も同様である。

える前に話し出したり、語り終えるのを待ち構えていたかのように話し出す。そして自分の話を長々と続けて途切れさせないようにするから、相手が自分の話を遮ったり割って入ることも再三起こる。相手にそうされるまで自分の話をやめない。米国人は相手が話し終わるとワンテンポ置いてから自分の話を始める。米国人の会話はテニスのようなもので、同じテーマについての話をやり取りする。日本人の会話は話が短く、しかもテニスでなくてボレーのようなものだ。一方が話し終わると、他方が別の話を語り始める。

- (J) ジャワ人は礼節をわきまえた話し方を重視する。優良なコミュニケーションの原則においては、話される内容だけでなくどのように話すかということも重要な問題になる。場合によっては内容よりも話し方のほうにウエイトが置かれることもある<sup>11</sup>。ジャワ語の階層言語である ngoko, kromo, kromo inggil という言語レベルの問題ばかりか、ボディランゲージも話し方の中に含まれる。ジャワ人は上品で繊細なスピーチを期待する。早口で話したり、圧力がかかって強張ったような話し方はダメなのだ。対面している相手への敬意を示すために、話すときには体の前で両手を重ねる。上位者に向かって話すときは、頭を少しうつむかせ、目も相手の目を見ないようにする。上位者の顔をまともに見るのは失礼な行為になるのだ。米国人が言うところの「Never trust a person who can't look you in the eye.」とは違っている。上位者の前では脚を組んで座ってもいけない。座る姿勢も背筋を伸ばさず、少し前かがみにする。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(5)」(2023年10月27日)

- (J) インドネシア人はおみやげをひとにあげるのを好む。これは国民倫理の一部になっている。女中

---

<sup>11</sup> だから話の内容が空虚なため、議事録を作る時に困ってしまうのだ。

でさえ、トアンが旅行するとおみやげを期待する<sup>12</sup>。昔はパーティが終わると、残った料理をお土産にして持ち帰らせる習慣があった。インドネシアの家庭に大きい冷蔵庫がなかった時代の合理性が生んだものだ。

- (フ) もらったプレゼントに対するお返し品の習慣はインドネシアにない。インドネシア人は誰から何をもらったかを覚えておき、自分がプレゼントをそのひとにあげる機会が来ると、自分がもらったものと同等かそれ以上のものをプレゼントする。
- (フ) 米国人は私的な手紙がタイプされていても気にしないが、ロシア人は手書きが当然だと思っている。ジャワ人は目上のひとに電話することに気後れを抱く。たとえばスルタンに何かを伝えたいと思えば、お目にかかって敬意を表する儀礼を示さなければならないと考えるからだ。その原理に従って、だれかが頼み事や寄付・資金融通などを求めてアプローチしてくる場合、相手が自分にお目にかかって敬意を表する儀礼を示すのが当然だと考える。
- (フ) コミュニケーション媒体としての手紙は書かれる内容によって公的なものと私的なものに区分できる。それをタイプや手書きといったスタイルで区別する文化があり、区別しない文化もある<sup>13</sup>。ジャワ人は目上のひとと会話したいとき、直接お目にかかって敬意を表する儀礼を示すのが礼節であると考えているため、儀礼の所作が相手に見えない電話でお耳にかかるだけでは失礼だと感じて臆するのだろう。社会生活における礼節は所作や態度で示すのが頻繁であるため、助力や金銭の援助を求める者も相応の儀礼を示して当然とジャワ人は期待し、直接会いに来ずに手紙や電話で済まそうとする人間を、礼節をわきまえない者と見なすにちがいない。
- (フ) インドネシア人は儀式 *upacara* が好きだ。儀式が行われる場合は必ずだれかがスピーチする。だからインドネシア人はスピーチが好きであり、大勢の前で堂々とスピーチし、またスピーチの要領もみんな心得ている。<sup>14</sup>

---

<sup>12</sup> [このサイト](#)の最終部分にこの「お土産対策」を示してあるのでご利用ください。

<sup>13</sup> インドネシアでは求職の時に提出する履歴書は不思議なことに全文手書きであった。

<sup>14</sup> だから、会議の席上でも議題には無関係なことを滔々と述べるが、議事録を作る段になるとすべて削除される。これは金曜礼拝の時のフトバの影響があるのではないか。

- (J) 本当はインドネシア人も形式主義者ではない。人間関係を壊さないようにするための行儀作法が社会の中に築かれているということなのだ。服装については、インドネシア人もおしゃれが好きだし、たいてい整然としたデザインの衣服を着こなしている。<sup>15</sup>
- (JJ) ヒエラルキー構造をしているインドネシア社会だから、上下階層間で行われる対人接触ではお互いが自分の立場を認識して確認するための作法パターンが作られている。インドネシア人の中で、好きでそれを実践している者は少なく、大多数はそれを実践しないことで発生する波風を嫌うがために従っているのだと教授は述べているように思われる。インドネシア人は概して自分の身を飾ることが好きで、派手さを求める傾向が強いように感じられる。飾った自分の身を世間に示すには確かに派手なほうが効果的だろう。幽冥の中の美という観念を感得し審美できる者はもちろんいるものの、社会通念としてはそれほど強くないようだ。自分の身を飾って世間に示し、自分が持っている美的センスを評価してもらうことで自己の存在確認を得ようとするのが世間一般のおしゃれ心理ではないだろうか。しかしそれは自分の外面を他人のための綺麗な鑑賞物にしているだけだという考え方もある。美的センスに欠けたべた一面の派手さはもちろん人目を引き、そして「センスのないなかつぺ」という世間からの見下しと侮蔑のまなざしが注がれるのが実態であるとはいえ、世間に自分を注目させて自己存在確認を行なうというポイントについては、センスの良し悪しと切り離しても筋は通るだろう。おまけにセンスの良し悪しの基準が流行によって振り回されているのが現実だから、世間の評価を絶対的なものと見なさないほうが自己存在意識の確立には良い効果をもたらすかもしれない<sup>16</sup>。

[ 続く ]

---

<sup>15</sup> みっともない格好をしていても平気なのは日本人だけだ。これは武士道にも関係するかもしれない。スマトラの田舎に駐在していた時、私を含めて同僚の日本人はくたびれたＴシャツを好んで着ていた。女中さんに「襟が擦り切れて伸びきったＴシャツは洗濯物を干すときに恥ずかしいからちゃんとしたのを着てください」と言われたが、業務終了帰国するまで誰もがそのくたびれＴシャツを着続けた。

<sup>16</sup> 中身(実力・能力)がないから外見で差別化するしかない、と日本人は思っている。

## 「インドネシア文化理解(6)」(2023年10月30日)

(J) インドネシア人は basa-basi を好む。家の前をひとが通ると、その家の主人がそのひとに声をかける。

“Mau ke mana?”

“Mau jalan-jalan saja.” あるいは “Mau ke selatan.”

“Mari, silakan singgah dulu.”

“Terima kasih. Lain kali saja.”

(JJ) ずっと昔の日本人も同じことをした。

「おや、どちらへ。」

「ちょっとそこまで。」

「じゃあお気を付けて、行ってらっしゃい。」

今のインドネシア人も昔の日本人も、まるっきり知らない他所の住人がたまたま通ったのに声をかけることはあまりせず、たいていは別段知り合いでもないが以前見たことがあってこの界隈に住んでいるように思われるひとに始まって隣の親しい一家に至るまでを対象に、そのようなバサバシを行っていたと思う。

basa-basi というインドネシア語は bahasa yang basi を意味し、basi には飲食物が腐敗して醜えた状態の意味と追加やおまけの意味があって、その両方が当たっているという説もある。KBBI の定義を見ると、社会交際における礼儀作法であり、情報を交換するためでなく単に礼儀として語られる言葉と書かれている。その意味であれば日本語は多分「お世辞」「社交辞令」といった言葉が対応するのだろうが、その日本語はすべて言葉を指していて、上のような会話の例をそれらの日本語で呼ぶのはどうもニュアンス的にフィットしない印象を感じる。語られている言葉が社交辞令なのでなくて、会話する行為そのものが社交辞令になっているのだから。そうであれば日本語の場合、「あいそをする」という動詞句にすればその難点を克服できそうだ。このバサバシという概念を言葉としての「世辞」「社交辞令」で対応させるよりも、言葉・行為・態度のすべてを

包含する日本語の「あいそ」のほうがより正確で応用度の高い対応語になるのではあるまいか。

このバサバシというのは言語コミュニケーションが持っている、情報やアイデアの伝達・指示や案内の通知・説得や誘導・感情表明・人間関係構築といった諸機能の中のただひとつ、人間関係構築だけを目的に行われるものだ。インドネシア文化が重要な価値を与えている社交性の中に設けられた社交術の一形式がこれだろうとわたしは考えている。

- (J) インドネシア人は、senggol-menyenggol と呼ばれる、パブリックスペースで見ず知らずの他人との間に起こる身体接触を問題にせず、ほとんど平気な顔で受け入れる。インドネシア人のスペースコンセプトは比較的狭いのである<sup>17</sup>。人口密度の高い社会だから、パサルのように人間が集まって来る場所ではセンゴルムニエンゴルが避けようもなく起こる。
- (JJ) 先に述べられているパーソナルスペースの広さと矛盾するような教授の解説だが、この問題は心理スペースでなくて物理スペースの問題と解釈するべきだろう。
- (J) インドネシアでは、(たとえわべだけであったとしても) 尊敬を示すことが真実を示すことよりも重要視される。だから客には饗応しなければならないのだ。たとえ出される物がすばらしくなくとも。それが尊敬を示すということなのである。同じように、新入社員は頭の鈍な先輩社員の言うことに従わなければならない。それが長幼の序という尊敬カテゴリーのひとつになっているからだ。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(7)」(2023年10月31日)

- (J) ムラユ=ポリネシア系文化は概して人間が集団になることを好む。社会交際面のファクターは豊

---

<sup>17</sup> 2013年頃にジャカルタからスルポン迄汽車に乗ったところ 300%越えの身動きできない超満員だったが女性を含め皆さんは我慢していた。

富だ。その反作用の中には、他人と競争して自分が高い成果を上げる意欲が低く、粘り強い姿勢をあまり示さないという性質がある。ところがムラユ＝ポリネシア系文化の人間が日本人や中国人の社会に混じると、競争心や業績志向を示すのである<sup>18</sup>。業績志向が高くない性格は生産性の低さにつながる。インドネシアは労賃が安いと言われているが、生産性も低いのだ。対業績比率で比較すれば、インドネシアの労賃は台湾や韓国よりも高いものになる。業績の低さは労働作業の速さに関係している。インドネシア人の作業速度は速くない。時間を尊重する観念が弱いことがそこに表れている。alon-alon asal kelakon<sup>19</sup>というジャワ人のモットーは、成し遂げることにかかれた価値のほうが遅速の価値よりも圧倒的に高いことを示している。

- (JJ) 社会交際を重視する場合、ひとは他人といかにうまくやっていくかということを考えるはずだ。他人と仲良くし、他人に良く思われようと努めるとき、その他人と競争して自分が勝とうという対立意識はなかなか持てないだろう。争いのない、暖かい親愛と調和に満ちた社会生活を生み出そうとするなら、たいていの人間は仲良し理論に走るのではないだろうか。他者との切磋琢磨と仲良し理論が両立する社会になるためには、うわべだけの仲良し理論でない、もっと深みと奥行きのある成熟した精神が必要になる。社会の外面的な調和の中にどこまでのライヴァル現象が納まるのかということがその成熟度の目盛りになるように思われる。社会構成員が持つべき社会性についてのインドネシア人の意識は高い。社会的な存在としての人間一個人のあり方を善とすればするほど、一個人のプライバシーは軽んじられていく。自分の銀行口座の預金通帳を会社の同僚たちに見せているローカル社員の姿<sup>20</sup>はかれらのプライバシー感覚がわたしのものと異なっていることを示している。異文化に置けるプライバシーの範囲とインドネシア文化のそれが同じであるはずがあるまい。そしてまた、インドネシア人が社会性という言葉で示している内容がしばしば、社交性を内容にしていることも起こる。ムラユ＝ポリネシア系文化が社会を社交の

<sup>18</sup> その通りで、インドネシア七不思議のひとつだ。いつもただら働いていたインドネシア人の同僚が日本に出張してきた時にはキヒキビとはたらいていたが、その後インドネシアで彼にあつたらやっぱりただら働いていた。

<sup>19</sup> 「時間がかかっても成し遂げる」の意味だろうが、時間がかかった割には進捗度が低いのが実情だ。この原因は熟考しないことと詰めが甘いことによる。

<sup>20</sup> 彼らはきっと自分の通帳の残高が少ないことを自慢しているのだろう。「こんなに貧乏なんだから、明日の昼飯をおごれよ」と思っているに違いない。

場と定義付けていることをわれわれはそこから感じ取ることができる。

(J) インドネシア人に curhat されたら、同情を求められていると解釈しなければならない。打ち明け話をする者は自分の苦悩と一緒に感じてもらうことを期待しているのだ<sup>21</sup>。インドネシア文化はシェアリング文化であり、物品も空間も感情も、あらゆるものごとを分け合い分かち合って集団が一緒に暮らすのである。

(JJ) curahan hati の短縮形 curhat は個人的な問題や包み込んだネガティブな感情をだれかに聞いてもらうこと。インドネシアのシェアリング文化には金銭も、そしてプライバシーまでもがかなりの程度でそこに含まれていることを理解するべきだろう<sup>22</sup>。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(8)」(2023年11月01日)

(J) 豊かな自然が容易な生活を支えてくれたために、インドネシア人は浪費型民族として有名だった。

インドネシア人の暮らしは、経済観念という骨組みにしっかり支えられていない印象が濃い。インドネシア人のパーティ招待状には出欠回答の要請がまったく見られない。そのために用意された飲食物が捨てられることは当たり前になっていた。

(JJ) 招待された者が誰を誘ってきても自由だから、招待状を出した人数より多めの飲食物が用意されるのが普通であり、招待者がひとり来ないだけでも数人分が残ってしまう。わたしがジャカルタで体験した現象のひとつに、マグリブ(日没)のアザンがモスクのスピーカーから流れると外の電灯を点ける慣習があった。ジャカルタでは一年中毎日、日没からおよそ30分あまり残照が続き、

---

<sup>21</sup> これは外面的なものであり、葬儀などの一部の例外を除き心底同情しているとは思えない。[ホスピタリティの問題](#)であろう。

<sup>22</sup> レストランで“free WIFE”という張り紙を見たことがある。さすがシェアリング社会だけあると感心した。



空が暗くなるのはそのあとだ。考えても見るがよい。毎日、家の外周に設置されている数個の電灯が灯りの必要のない場所で電力を消費するのである。そして毎日、その浪費は意図的に行われているのだ。電灯を点けるのは日没の直後に悪魔が出てきて徘徊するからであり、小さい子供は日没になるとすぐに帰宅しなければ悪魔に悪さされるのだという理由も耳にしたが、どうも経済観念に欠けたしきたりが維持されているだけではないかとわたしはいまだに思っている。<sup>23</sup>

- (J) 米国人は効率主義者であり、効率を高く崇拝している。ジャストオンタイム。サクセスやプレステージを手にするためのプロセス。効率は「時間にピッタリ」という時間意識と深い関りを持っている。時間を守らず、何をするにも自分の好き勝手なやり方を行なっている、あまり効率的でない政府や国民が住んでいる国に行った米国人はフラストレーションに襲われる。インドネシアでインドネシア人はあまり効率を追求しない。多くの場合に効率はむしろ阻まれるのである。効率の向上は失業者を増加させるのだ。タバコ会社はオートメ化できるにもかかわらず、昔からの大量の人間の手作業で一本一本作る方法を継続している。
- (JJ) タバコ会社は民間企業であるというのに、オートメ化に政府は強く干渉して来る。オートメ化を妨げるために政府は機械巻きタバコの本当たりのタバコ税を手巻き製よりも高い税額にしている。効率という概念は時間が基準として使われているように思われる。時間の観念が異なっている文化に、米国人が理解し把握している効率と同じものが出現し得るだろうか。<sup>24</sup>
- (J) インドネシア人は時間の奴隷になっていない。社会交際上で使われている「遅れる」「遅れた」という言葉は、だいたい30分くらいをめどにしている。
- (JJ) 遅刻という言葉の意味について教授は、30分以上の遅れが標準にされていると述べているようだ。つまり5分や10分、あるいは27分くらい遅れても、インドネシア人は時間に遅れたという意識を持たないのだろう。わたしがインドネシアビギナーのころ、やはりインドネシア人の標準ビヘ

<sup>23</sup> マグリブとその後のイシャーの間は一時間ほどしかないので、食事などで忙しいから忘れがちだからなんでしょうね。

<sup>24</sup> これは困難だ。Sumber daya manusia=人的能力の「改善」というスローガンは20世紀から叫ばれ続けている。スローガンというものはそれができないから存在意義がある。改善⇒考える⇒疲れるから嫌だ⇒低生産性⇒改善⇒スローガン、という悪循環になるのだ。

イビアであるゴム時間 jam karet に何度も鞭打たれた。10時に会うという約束をしたから、わたしは10時数分前にそこへ行って相手が来るのを待っていた<sup>25</sup>。しかし30分が過ぎ、40分経過しても相手は顔を見せない。11時少し前にやってきた相手に待たされた愚痴を言ったところ、「今は10時56分だから、まだ10時だ。約束は守っている。」と切り返されて開いた口が塞がらなかった体験をした。じゃあ、インドネシア人との時間の約束は分単位でしなければならないのだろうか？それが奴隷根性というものなのではあるまいか。[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(9)」(2023年11月02日)

- (J) 他の人と食事すると、必ず誰かがみんなの食事代を払うのがインドネシアの風習だ。同じような顔ぶれで頻繁に行われる場合は、誰が決めるでもなくて回り持ちのコンセンサスがすぐに形成される。もしも、だれもが金持ちと認めている人間がその中に混じっていれば、社会モラルとして金持ちの負担が当然というコンセンサスもあるために、ほとんど毎回金持ちのおごりということになる。そういう立場に立つ人間を言い表すのに *cukong* という言葉が使われる。チュコンのいないグループでは、みんなで金を出し合うこともなされる。その場合には、細かい内容をだれも気にしない。
- (JJ) *cukong* とは福建語の「主公」がインドネシア語に撮りこまれたものだ。現代中国語でも発音はほぼ同じであり、意味もよく似ている。中国語の意味は身分関係におけるご主人様が第一義で派生語義がいろいろ別れるのだが、インドネシア語の語義は金主が第一義になっている。とても自分の資金ではできないような規模のビジネスを行なっているインドネシア人の青年実業家はたいてい、チュコンが裏に付いているのが普通だ。チュコンは人間にも投資するのである。わたしはインドネシアビギナーのころ、会社の部下を誘って昼食に出たことがある。自分が食べたものを自分が払うという日本式常識に従ったところ、部下が不満げな顔をしてこう言った。「インドネシ

---

<sup>25</sup> このことを持って「日本人は時間を守らない」とインドネシア人は言う。「10分も前に来た」と。

アでは誘った人間が誘われた者の支払いもするんですよ。」わたしは日本式常識を成り立たせている論理を説明した。「自分が食べたものを他人に支払ってもらうのは、支払者に対する負債の発生を意味している。支払い能力がないなら話が違いますが、他人に負債を負えばその者と対等の立場に立つのが困難になる。対等な人間関係を維持するためには、自分が必要なものを他人に支払ってもらうようなことは避けるべきだ。」今にして思えば、インドネシア人の金銭観念に対してまるで的外れなことを言ってしまったようだ<sup>26</sup>。金銭というものはインドネシア人にとって心理的な負い目の原因になるものではなかったのである。インドネシア人にとって精神的な負い目になるのは恩を与える行為<sup>27</sup>が自分に対してなされた場合であって、金銭負担はその埒外に置かれているように見える<sup>28</sup>。死に物狂いになって、石にかじりついてでも個人的な借金を返そうとするインドネシア人が滅多にいないことがそれを説明しているようにわたしには思われる。<sup>29</sup>

(J) インドネシア人は他人に何かをあげるのを好む。チップや心付けとして金銭をあげる際にも、金額を大きくしがちだ。ジャカルタのホテル従業員の話では、インドネシア人金持ちのチップは金額が大きく、単なるチップなのに25万ルピアもらった者がある。外国人へのプレゼントも、高価な品物を進呈するケースが多い。<sup>30</sup>

(JJ) チップの金額はだいたい相場が決まっているので、それより小さいともらう側が嫌な顔をし、相場より大きいと相場が引き上げられて他の客の支出を増やすことになり迷惑をかけるから、しっかりと相場通りに振る舞わなければならない、という話をするひとがときどきいた。少なくともインドネシアでそんなことはありえないのだが、観念主義者はどうもそういう話を信じてしまうようだ。あるホテルのポーターが25万ルピアのチップをもらったからと言って、そのホテルのチップの相場もその都市のホテルチップの相場も25万ルピアになるわけがないではないか。ノーと言えない

<sup>26</sup> インドネシアでインドネシア人の友人から「お前は海外手当をもらっているからこの代金を払え」といつてきたので「お前が日本に来た時にはお前が払うんだぞ」と言ったら無言だった。

<sup>27</sup> Hutang budi。これは絶対に償還できないと思われている。

<sup>28</sup> [こんなブラックジョーク](#)はいかがですか？

<sup>29</sup> だから、インドネシア人の友人は、親しい人に借金を申し込まれた時に「その金額の半分なら貸してやる」と言っています。これでほとんどの場合引き下がりますので、ご利用ください。

<sup>30</sup> 相手への尊敬の念を表すというより、自分がいかに金持ちかということを自慢する割合の方が高いように見える。

国民性を持つ観光客に吹っかけてみようという行為はもちろん起こるだろう。先例があろうがなかろうが、それをしようとする人間は必ずいるものだ。他人のチップ金額をとやかく言うのは対処の方向性が間違っていないだろうか？

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(10)」(2023年11月03日)

- (J) インドネシア人にとって業績や成功へのオリエンテーションはそれほど強いものになっていない。一般的な生活意識が競争社会からまだ遠い位置にあるからだ。自然の恵みが人間の生存を容易なものにしているために、*gampang puas* と呼ばれる性格を育んだ。そこそこの成功が得られたらそれでよしとし、大成功を実現させようと全身全霊を込めて追い求めることまではしない。それをジャワ人は *Sakmadya, tidak usah ngoyo.* と表現する。中途半端なオリエンテーションなのだ。事業が成功して新興成金になったインドネシア人はオカベと呼ばれる。Orang Kaya Baru の頭字語だ。インドネシアのオカベたちは概して長続きせず、容易に転落して行く。質素な暮らしをもっと続けようとしなくて贅沢三昧を始めるから、長続きできない。プロジェクトを受注した請負業者がクレジットの金を手に入れると、工事を終わらせるよりも先にベンツを買って乗り回し、妻の数を増やすのである。そして工事が完了する前にかれば破産してしまう。中国人がほんとうに離陸してから贅沢を始めるのと大違いだ。
- (JJ) 業績をあげて世間から見上げられることはもちろんインドネシア人も大好きだから、切磋琢磨するモチベーションがないわけでは決してない。ガンパンプアスというのは貪欲でないという意味だろう。小成に安んじて、大成する前に努力を終わらせてしまうのである。インドネシア社会は金持ちになった成功者を貴人のように遇する。贅沢三昧の暮らしが魅力的であるということよりも、社会の貴人になって下にも置かない待遇を得ることのほうが、インドネシア人にはより大きい魅力になっているのではあ

るまいか。世間から見上げられてチャホヤされることがオブセッション<sup>31</sup>になっていて、金持ちになるのはそのための手段にされているようにわたしには見える。世間にとって、金を湯水のように使う人間はエライひとであり、エライひとをみんながチャホヤするのがインドネシア社会の特徴であるように思われる。シェアリング社会だから金持ちは自分をチャホヤする人間に容易に金を与えて喜んでもらおうとする。チャホヤする人間にもメリットがあるからこそ、チャホヤが行われるのだ。この種のエライひとは世間から見上げられてチャホヤされることによって自己存在を確認するというメカニズムの中に自分を置いているように感じられる。金持ちにならなくても、金を湯水のように使うことはできる。自分の所有になっていない金であっても、自分がそれを自由自在に使える立場に立てばよいのだ。世間はその人間の評価資産リストを見て金持ちと思うのではなく、金の使いっぷりを見て金持ちのラベルを貼るのである。自分の一家一族の生活基盤の確立や社会名士というステータスがもたらす名誉欲の充足が金持ちになることの目的なのでなく、世間からエライさんとして見上げられてチャホヤされるというあり方の中に出現する自己存在確認が金持ちになることの意味合いなのだろう。おまけに金持ちであることを社会に示すために散財しなければならないのだ。大金を持ちながらそれを隠して質素に生きている人間をだれがチャホヤしてくれるだろうか？この原理が「金がイージーカムイージーである」「金に未練を残さず、他人に与えるところに喜びがある」といった金銭取扱い姿勢や信念と一緒にあってインドネシア文化における金銭感覚を形成しているとわたしは考えている<sup>32</sup>。インドネシアのような自然環境であれば、金がなくとも土地さえあれば食いつなぐことができる。たとえその土地の所有者が他人であっても、土地が食糧を産してくれるのだ。都会の住民が老後のために田舎に土地を買くと、その土地が占拠されたり勝手に水田にされたりしないよう、地元の人に金を払って見張り番をしてもらおう。見張り番はその土地に好きな作物を植えてそれを自分の収穫にする。もちろんシェアリング社会だから土地オーナーにも一部を分ける。金がないと餓死凍死してしまう怖れの高い国とは土地の意味合いさえもが違いを持っている。金のために必死になって生きる文化と金がなくとも露命がつながる場所の文化では、金に対する姿勢が異なって当然という気がする。もしも文化に

---

<sup>31</sup> 強迫観念

<sup>32</sup> 「世界一の金持ちはどんな人か？」「何も必要としていない人だ」とインドネシア人は言う。だから物欲の奴隷になっているインドネシア人は金持ちになれない、という結論に至る。

よって金銭の意味が大きく異なっているのであれば、異文化にある金銭観念を誤った基準で評価するという愚は避けたいとわたしは思う。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(11)」(2023年11月06日)

- (J) インドネシア人は平静な感情を維持することに強い。そしてまた、インドネシア人は威厳や見映えを良くすることも大切にする。威厳の中に見せかけの自尊心が暗示されている。
- (J) ジャワ人は感情をおもてに表さず、自分が何を感じたかを語ることもめったにしない。
- (J) 人間は常に平静を保ち、あらゆることがらにおいて自分がそれと調和を保っている姿や態度を示さなければならない。完璧に自己をコントロールし<sup>33</sup>、いつも優雅で上品に振る舞わなければならない。それがジャワ人の理想的な人格を物語る哲学である。ジャワ人は謙譲や自己卑下を好む。
- (J) ジャワ人は顕示的な強い感情表現をしない。心から打ち解け合える親友も少ない。恋愛関係も同様だ。ジャワ女性は男性よりもよくしゃべり、にぎやかだ。女性は表情豊かで、ほとんど一日中しゃべり、よくふざける。しかしその終日のおしゃべりは男性の沈黙とほとんど同じ機能を果たしているように見える。つまり周囲の人間との間に距離を置くためのものなのだ。ジャワ人の動きはまるで踊りのように均衡が取れていて、柔軟だ。全身のすみずみまでコントロールが行き届いているように見える。静かで落ち着いてコントロールの効いたかれらの姿勢はリラックスしているのではなく、異変に備えているのである。突然起こるかもしれない変事に対する、絶えざる警戒なのだ。オープンな喧嘩はめったに起こらない。怒って大声で怒鳴ったり取っ組み合いしたりするようなことはない。しかし喧嘩のない世界はこの世にない。ジャワ人はコンフリクトを公にせず、直接的な非難や攻撃の代わりに皮肉・嫌味・ほ

---

<sup>33</sup> できもしないくせにこんなことばかり言うからこんな笑い話ができる。

のめかし・無視・そこはかかない蔑みなどを使う。対立があからさまな段階に達したら、完全に関係を絶つ。ジャワでアルコール飲料は容易に手に入るし、また社会も許容的だが、酒好きは少ない。結末がどうなるかを知っているからだ。= The vocabulary of emotion, The Study of Javanese socialization process – Hildred Geertz 1959 から引用

- (J) 米国人にとっては、その人物の氏素性よりも何をなしたかということの方が重要な意味を持つ。地位よりもプレステージのほうに高い評価を与えるのである。インドネシア人はその人間の社会的地位を重視する。だから *biar garing asal garang*。薄給でも社会的身分の高い公務員や軍人になりたがる。
- (J) 米国では、地位があることとプレステージがあることはそれぞれが並立的に価値を持っているものの、インドネシアではどんなに低くても地位があることのほうに値打ちがある。
- (J) 米国人の思考方法は分析的且つ帰納的。事実を系統立て、線形論理を使って結論に達する。インドネシア人はまず全体の問題をベースに置き、関連事項をそこに加えて、線形論理を使わない文脈論理で結論を出す。日本人は循環論理を使う。
- (J) 米国人はポジティブシンキングを重視するオプチミストだ。イニシアティブを持つことが期待され、現状改善が義務にされ、進歩するためのチャンスがだれにも与えられる。自己満足する者はあまりおらず、常に前進することがオブセッションになっている。インドネシア人も概してポジティブシンキングなオプチミストだ。ただし直面している問題を軽く見すぎる点に行き過ぎがある。アクションに移ったなら、あまりエキサイトすることなくローキーで事に当たる。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(12)」(2023年11月07日)

- (J) インドネシア社会はヒエラルキー社会であり、構成員のすべてがいずれかの階層に区分される。

berdiri sama tinggi dan duduk sama rendah ということわざは、対人接触において自分を相手と同じ高さに置くことの美德を称える表現だ。ところが野菜を担いで売り歩く巡回物売り女は邸宅の奥様が野菜の品定めをするとき、立ったり中腰でいる奥様と同じ高さに自分を置こうとせず、必ずしゃがむ。昔のジャワでは、中流以上の貴人は名前の前にラデンやラデンアユなどの尊称を付けるのが当たり前になっていた。

- (f) インドネシアは垂直方向のオリエンテーションが強い社会であり、上司やリーダーなど上位者への依存性が顕著だ。封建制やコロニアリズム時代の残滓をいまだにひきずっている。王が国家に関するあらゆることを決めるように、父権制社会では家父長が家庭内のすべてを決める。中央集権的政治構造においては、あらゆることが上で決められて下に降りて来る。下位者は失敗を恐れてイニシアティブを振るわず、創造性を働かせない。
- (f) インドネシア人の処世哲学の中にあるABSは特徴的な文化の果実である。インドネシアの子供たちは、自分が話したり振る舞ったりする行為行動が他人に心地よさを与えるように指導教育される。その結果、社会生活やビジネス生活において下位者は自分の振舞いが上位者を歓ばせて心地よさを感じてもらうように努めるオリエンテーションを持つに至る。それが尊敬を実体化させることになるのだ。悪い事実をありのままに述べては、上司は不愉快な思いをするだろう。上位者が聞いて喜ぶこと、聞きたいと期待していること、をその耳に入れるのが相手への尊敬を示す下位者の態度になる。われわれはパパを歓ばせたいのだ。上位者のパパが恥ずかしい思いをしないで済むように。しかし上位者のパパが現場の実態を知らないでは、パパが仕えるもっと上位の人たちの前で体面を失うことになる。だから上司のパパは、部下からABSを聞かされてもいいように、部下のルートとまったく切り離された別のルートで顧問を持ち、このABS構造に対処しようとするのである。
- (ff) ABSとは Asal Bapak Senang の頭字語だ。「パパが歓ぶ結果になるかぎり」を意味している。組織の上位者は現場がよく整えられてうまく収まっており、問題やトラブルが何も起こらないことを期待している。すべてがうまく回っていればパパは歓ぶのだ。現場で起こった悪いことを耳に入れたら、パパの歓びは目減りして行く。尊敬するパパには最大の歓びを差し出すのが部下の務めなのである。組織内における上司と部下の関係は職場での役割分担でなく、疑似的な親子関係になっている。ABSと



という言葉は決してビジネス世界に限定された用語でなく、家庭生活や社会生活の中にも出現する。

- (J) 組織の中の上司と部下の関係は、インドネシアでは上司が部下の私的な問題にまで関与しなければならない。業務外の私的な問題においても組織内の上下関係がそのまま持ち込まれる。対等な関係にはならない。国家公務員の妻の組織であるダルマワニタが夫の業務評価や昇格の決定に影響を及ぼすことも起こりうる。
- (JJ) この現象はしばしば家族的な社会生活という言葉で語られている。温かい家族的な人間関係が善であり美であるという家族主義を奉じる社会は、社会生活の中で他人に対しても父母兄弟姉妹などの家族内の立場呼称を使う習慣を養った。血縁関係になくとも、自分を父と呼ぶ人間に対して父のごとく振舞うのが良き社会人のあり方になるのである。ただしこの家族主義は別の面も持っている。個人の評価の中に、その個人の家族の影が映りこんでくるのだ。個人が個人として見られず、個人の所属集団の色が混じりこんで不純なものになる可能性が常に存在している。[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(13)」(2023年11月08日)

- (J) インドネシアで何かを決定するための会議が行なわれるとき、musyawarah~mufakat 原理にもとづいて議事進行が行われる。会議参加者は徹底的に意見を交わし、最終的にコンセンサスが形成される。そのため、票決が行われないのが普通だ。達した結論に反対する者たちは、陰で愚痴を言うことしかできない。この方式ではたいへん多くの妥協が行われることによって集団の和が維持されるのである。出される意見もたいていが集団や階層の利益を代表する形を取り、個人の考えという色合いは薄い<sup>34</sup>。インドネシアの慣習の中で悪い面が顔をのぞかせるのは、若年の会議参加者があまり意見を述べず、年長者たちの前で畏怖してしまうことだ。これは多分、インドネシアの家庭教育やしつけが専制主義的だからだろう。年長者の指示にさからってはいけない。人生体験をより多く積んだ年長者の言

---

<sup>34</sup> 論理的・技術的妥当性という点においてもかなり低い。問題に対して柔軟に対処できない。

うことには素直に従うのが善なのである。

- (JJ) 複数の人間に関わることを決めるとき、その決定の場に参加するひとたちはムシャワラを行なってムファカッを模索するのである。ムシャワラとは問題解決のために合意事項を決めるのを目的にして一緒に検討することを意味しており、ムファカッは同意や合意を意味している。何かを決定するための会議を催すとき、会議参加者がそれぞれ自分の意見を述べ合い、質疑応答し、最終的にコンセンサスに達するというパターンがムシャワラ～ムファカッというものだ。投票したりして多数決で決めることをしない。参加者を賛成派と反対派に二分して、数のパワーで相手をひしぐというメカニズムにしないのである<sup>35</sup>。反対していた者がムファカッするためには必ず妥協が発生する。知らなかったことを知らされ、考えの及ばなかった点を啓蒙されて賛成派に転向するのであればたいした不都合はないだろうが、立場や人間関係を壊さないためというような別の要素に導かれた妥協であるなら後悔が妥協者を事後にさいなむかもしれない。ムシャワラで決まったことがらに対していつまでも陰に回ってぶつくさ言う人間にはたいてい、妥協の基準が不純だったという要素が影を落としているのではないだろうか。ともあれ、ムシャワラの中で公式に同意を表明したのだから、社会生活の中でその姿勢を覆すわけにはいかない。こうして社会における共同生活に波風が立つことは回避され、和をもって貴しと為す原理が実現されるのである。<sup>36</sup>ムシャワラというのは少人数で何かを決めるときに必ず使われている、世界でユニバーサルな方法のようにわたしには思われる。たとえば家族旅行の行き先を決めるとき、あるいは家族で外食する場合のレストランを決める際に、鶴の一声でなくてみんなで民主的に話し合って決めようとする場合には必ずムシャワラ方式になるのではあるまいか。挙手や投票で決める一家がないという気はないが、決して一般的でない気がする。ジャワ人はその少人数方式を地域社会から果ては国家社会にまで拡大して伝統慣習にしてきたという見方ができそうだ。鶴の一声は専制主義でありデモクラシーは投票や挙手による多数決だという二元論は、人間というもののもっと奥深い面を見ようとする浅慮かもしれない。米国人でさえムシャワラを行なうのだ。「12 Angry Men」というハリウッド映画の中にわたしは、米国人がムシャワラ～ムファカッを行なうとこんな様子になるの

---

<sup>35</sup> 少数の反対派に黒魔術の呪いをかけられるという危惧も考慮に入れるからだ。

<sup>36</sup> 緊急事態でムシャワラ方式を追求するとこうなる。

だということのサンプルを見る思いがした。

- (J) 米国人は langsung dan terus terang を好む。langsung とは direct の意味であり、te-rus terang は frank を意味している。介在物や夾雑物の混じらない状態と率直で正直にありのままを示す態度を指している。いわゆる straight forward だ。ところが東洋でそれはアグレッシブ且つオフェンシブであると見なされて嫌われる。他人への批判、金銭や助力の要請、などといったセンシティブなことがらを述べる時、インドネシア人は terus terang を好まない。それがあからさまに述べられることによって、(自分を含めた)誰かが体面を失う事態を防ごうとするのである。言葉に出して明瞭に言わない内容を推察することがインドネシア人同士の間で期待されている。ジャワ人はそれを tanggap ing sasmita と称した。ジャワ人の会話は儀礼的な世間話四方山話で長々と時間を費やし、自分の訪問の目的についてはそこはかたなく匂わず話をして本質の周辺を堂々巡りし、相手が自分の真意を理解したと判断できればそのまま帰宅するが、どうしても察してくれないようだ と確信したとき、はじめて本音を語る。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(14)」(2023年11月09日)

- (J) 依存し合い、互いに助け合う、美しい共同体文化を持つインドネシアでは、ゴトンロヨンが社会倫理にまで高められた。相互依存に価値を置く社会では、個人の自立は反社会的傾向を帯びる。結果的に、子供の教育としつけは個人の自立を重視しないスタイルで行われてきた。インドネシア人の家庭生活において小さい子は必ず女中や姉に助けられるので、子供自身が自立への欲求を持たなくなる。そんなひとびとが大人になって構成する社会も同じメンタリティで運営される。米国人お好みのパイオニア精神やアドベンチャー精神がインドネシア人のメンタリティに芽吹いて花開く機会は稀有なものになる。移住政策トランスミグラーシで成功している地方はたいてい全村あげて移住したケースだ。ジャワ人の mangan ora mangan asal kumpul 哲学がその面の基盤を成しているように思われる。

(JJ) オランダ人が始めた過疎地域開発のためのトランスミグレーション政策では、家族単位のグループが集まっただけの集落はより広範囲な生活領域における共同体意識が醸成されるまでに時間がかかるため、伝統化した集落全体のしきたりが最初から運営されるケースに比べてなかなかスムーズに発展しないのだろう。ジャワ人の「食べても食べなくても、集まってりゃそれでいい」哲学は、自己存在を孤にできない宿命の人間が互いに一緒にいることでその存在を安定させる心理を語っているようにわたしには思われる。個人は容易に孤(独)人になる。それが人間の宿命だからだ。自分が個人であるのは好きだが孤人になるのは嫌だというひとは、本源的な孤独を自分の想念から追い払って忘れ去ることで幸福の影の下に自分を置くことができるだろう。依存し合う共同生活の中では孤を否定することができるのだ。そこに安住すれば、たいていの人間は幸福な思いをするにちがいない。幸福感もきっと高まるはずだ。孤人になりがちな自分をきっぱりと捨て去りたければ、自分が個人であることをやめて帰属する集団の一部品になればよいという理屈になる。<sup>37</sup>

(J) 米国人は個人意識がとても高い。日本人は所属集団アイデンティティがとても強い。インドネシア人は個人意識が米国人に比べて劣り、所属集団アイデンティティも日本人ほど強くない。米国人は子供のときから自主独立をしつけられるので、他者への依存を嫌う。インドネシア人は他者への依存心がとても強い。幼児期からの養育において子供は常にだれかに扶けられる。共同体生活も他人と依存し合うものになる。中央集権制度が依存を助長する。常に上からの指示を待つ姿勢が心理の中に生まれ、自分で考え、結論を出し、それを自分だけの力で行動に移す勇気が育たない。<sup>38</sup> イニシアティブはか弱く、失敗を恐れるために上位者への依存が強まる。封建制やコロニアリズムは下位者のイニシアティブを抑圧するので、オランダ統治下のインドネシア人はオランダ人の用意した揺りかごで子守歌を聞かされながら安眠していた。それが *terima beres dan enak* というものであり、つまりは満足できるものを他者に全面依存して手に入れ、そこに心地よく安住するのである。

(JJ) 中央集権制度というのは国家統治・社会統治でのものだけでなく、社会生活・家庭生活の中にも出

---

<sup>37</sup> インドネシア人男性と出張に行きホテルで別々な部屋をとると、翌朝「一人では寝られなかった」としばしば聞く。でも、編者はそういう趣味はないからオッサンと同じベッドでは寝たくないのである。

<sup>38</sup> 「自分で考えた結果」を示す特許出願数では日本は3位でインドネシアは42位だ。

現する。父権制・家父長制などというものはたいていの場合、最終決定権がひとりの人間の手の中に集中する中央集権制だ。教授はそのことを言っているのだろう。オランダ統治下でプリブミが心地よく眠り呆けていたというように読める教授の揺りかご話は依存心についてのものであって、プリブミが心地よい暮らしを楽しんでいたということでは決してない。国家社会制度を構築して運用するような仕事をしないでも、オランダ人がそれをしてくれるのだから、そこはオランダ人に依存してトゥリマベレスにかまけ、あとは決められた Do's and Don'ts に従っていれば、まあなんとか食っていけるだろう、という考えを指していると思われる。オランダ人が定めた Do's and Don'ts は言い換えると、その正体は苛斂誅求だったのだが……

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(15)」(2023年11月10日)

- (f) インドネシア文化の特徴のひとつに、これから何かをしようという場合、親や社会的有力者に祝福してもらおう慣習がある。高官や社会的高位者になったのに誰も祝福を求めに来ないと、かれは気を悪くする。しかし祝福の祈りをしてくれた高官や高位者は、計画進行中に何か悪いことが起こっても全然助けてくれない。
- (ff) 祝福してもらおうというのは、正確な言い方をすると神の加護が得られるように神に祈ってもらうことだ。自分がしようとしていることに反対するひとがそんなことをするわけがないから、それをしてくれる親や有力者自身が自分の側に立っていることを意味し、つまりはかれらからの祝福も一緒に得られていることになる。もちろん神がほほ笑んだか顔をしかめたかは、計画の結果を見なければ判らない。
- (f) インドネシア人の ya(イエス)が同意や了承でないこともある。インドネシア人は信用できないのだ。東洋人の美德の中に、否定や拒否をはっきり言わないで相手の心情が傷つかないように配慮する振舞いがある。自分の上司や上位者などのような、自分が尊敬を示すべき相手に否定や拒否をあからさ

まに示すのは適正な振舞いでない。相手を不愉快にさせたり、傷付けたり、体面を壊したりしないためには、否定や拒否は隠さなければならないのだ。そんなときの「ヤー」の意味は、明るさや活気のない顔つき、か細い声などから察することができる。部下に「できるか？」と尋ねて「ヤー」の返事もらった方がいいが、いつまでも着手しなかったり、開始を遅らせ続けるような様子が見えたら、あのときの「ヤー」の言葉は否定の「ヤー」だったのだと解釈すべきだ。<sup>39</sup>

(J) 体面を損なうというのはインドネシアで重大な問題になる。娘への結婚申し込みを拒むことはしないものの、親や親族が望んでいない相手からの申し込みの場合は結納がほとんど不可能なレベルにまで吊り上げられる。申し込んだ側はそれを見て相手の拒否を判断するが、体面が損なわれることはない。やってもうまくいかないからやるだけ無駄だという結論が見え見えであっても、命じられたさまざまなことをせざるを得ない状況が人間にはしばしば起こる。統率者や高位者の体面を壊さないようにするためだ。ジャワのことわざに、Sabda Pandita Ratu, mudah itu tidak boleh dijilat lagi.というものがある。神君が詔を発したときに飛んだ唾はなめ戻すわけに行かないというような意味で、つまりきわめてオーセンティックな立場の人間が言った言葉が否定されたり背かれたりしてはならないことを表現している。神君的立場の人間の威厳を守るために下位者の全員が総力を挙げてその言葉に従って見せることをするのが、組織の安定と団結を作り上げるみなもとなるのである。

(J) 恥をかいたり体面を失うことは、インドネシアのみならずアジア全般における大問題である。恥が発生する理由は数えきれない。体面が失われるのは、その者がかぶっている面がはがれて、社会的に認知されている姿と異なる醜悪な姿が露呈されたときだ。親分が恥をさらすと子分たちが別れの挨拶もなしに去って行くのは、親分との対決を避けるため。インドネシア人が公衆の面前で他人を叱ったり批判したりしないのは、恥をかかせず、体面を失わせないためである。もしもブギス＝マカッサル地方でそんなことをすると、短剣で刺されるリスクに直面しなければならない。<sup>40</sup> [ 続く ]

---

<sup>39</sup> 仕事の進捗具合を尋ねる時に、編者は Sudahkah～～とはいわず、必ず～～belumloh という。そう言わないと正しい真直度は報告されないからだ。

<sup>40</sup> ジャワでは黒魔術による呪いである。

## 「インドネシア文化理解(16)」(2023年11月13日)

- (J) インドネシアの子供たちは甘やかされて育つ。おとながいろいろと世話をするのだ。食事は食べ物をスプーンで口に入れてくれる。泣くと抱いてくれる。寝る時はおとながあやして眠らせてくれる。夜の就寝は母親と同じ部屋の同じベッドで眠る。両親祖父母兄弟姉のみんなが甘やかしてくれる。愛情に包まれた幼児期の暮らしとしては理想的だろう。しかし自立という面については劣悪なものになる。
- (J) インドネシアの子供たちは両親が言うことを鵜呑みにして受け入れるように習慣付けられる。親や先生が答えられない質問を子供がすると、子供のほうが叱られる。子供と親が話し合い、討論し、意見交換する場面はインドネシア社会に少ない。親の言うことに子供が反対意見を述べると、親は怒るのである。子供が成人しても、親は子供に影響を振るおうとする。成人した自分の子供をいつまでも未成年扱いし、その生活に干渉しようとするのだ。
- (JJ) 30代後半のインドネシア人男性がいた。かれは10年ほど貨物船やタンカーの乗組員として働き、最終的に米国に移住するプランを立てた。船から米国に上陸してそのまま逃亡し、オーバーステイを何年が続けたあとグリーンカードを取得し、それから妻子や親族の希望者を米国に呼ぼうという算段をしたのだ。かれの両親もそこに含まれていたようだ。それがそう簡単にできることなのかどうかわたしにはまったく判らないが、本人には確信があったようだ。かれは不法滞在のまま数年間米国で働き、ジャカルタに仕送りした。かれにはジャカルタに妻と二人の子供がいて、長女はハイティーンの娘になった。かれからの仕送りのおかげでジャカルタの妻子は経済的に困らない暮らしをするようになったのだが、あるとき不幸がこの一家を襲った。長女が麻薬を覚えたのである。かれの仕送り金を貯めである銀行口座は長女が握っていた。かれの妻は小学校も終えていない人間であり、銀行の諸手続きを自分でやりおおせる自信がなかったから、銀行関連のことがらは長女にさせていたのだ。一般庶民の口座残高をはるかにしのいでいた銀行口座はあれよあれよという間にやせ細ってしまった。そしてそれが発覚したとき、妻は夫の両親に対策を相談した。両親は孫娘の不始末と父親不在を結び付けてあっさり結論を下した。「ジャカルタニスグカエレ」米国でグリーンカード取得の動きを始めようと

していたかれはすべてを投げ捨てて、今度は米国から脱け出す算段を始めたのである。かれが何年もかけて行ってきたすべての努力とリスクは親の一声で水の泡となった。そしてジャカルタに戻って来たらかれは失業者のひとりになり、宝石貴金属骨董品などの委託をもらって買い手を探し、売れたら手数料をもらう境遇に落ち込んだ。かれの一家はまた昔のような貧困生活の中で、家族の結びつきを大切にしながら暮らしている。そういう実話をわたしはジャカルタで1990年代に見聞した。

[ 続く ]

## 「インドネシア文化理解(終)」(2023年11月14日)

- (J) インドネシア人は深刻な問題を軽く見なす姿勢が優勢だ。これは計画性との関連を持っている。計画を立てる際に徹底的にあらゆる可能性を掘り下げ、どのような不測の事態が起こっても対処できるまで計画を練り上げることに慣れていない。長期計画の場合はなおさらのことになる。長期計画性を持たないでも人間を生きさせてくれる自然が人間を甘やかした。ジャワ人の口癖 Ana dina, ana upa.は「日あれば飯あり」。日が替われればその日の飯がまたかならず付いてくる。この世界では人間が自然を支配する必要がない。大自然は何かを作り出し続け、人間は毎日毎年、自然が作り出したものを糧にして生きている。生きることはイージーな行為であり、その容易さが *Itu bisa diatur*. 哲学を生み出した。どんな問題が起こっても、その場その場で必ず解決への道が見出せる。非合法的、あるいはまともでない方法であっても、目的に到達する道は存在する。リスクを冒してでも目的を達成したければ、こうすればいい。だから時には、その中に巨大なゲームが生じることになる。「*Itu bisa diatur.*」というセリフは Adam Malik 氏が流行らせた。<sup>41</sup>
- (JJ) 人間を凍死も餓死もさせない環境はやはり、人間が自然の中に抱かれる矮小な存在として安住することを誘導したのだろう。支配被支配という対立概念が作られず、代わりに依存し甘え、負担をかけて自然を疲弊させる関係に向かったように思われる。何とでもなるというオプティミズムは表面的な視野

---

<sup>41</sup> 解決の出口を探し回って考えてはいるようなのだが、思考がぐるぐる回りになって良い結果が得られないのが実情だ。



の中に充滿していて、奥底の疲弊にまで目が届いていないかもしれない。

(J) インドネシア人は濡れていると綺麗・清潔であると考えている、と外国人は考えている。

(JJ) 教授のこの一文は多分、公衆トイレの床の濡れ方が尋常でないことに関する話だろうとわたしは思う。

なぜなら、綺麗・清潔であることと濡れていることは関係ないという理解をインドネシア人がしているからだ。食卓に清潔で綺麗な皿を置こうとしてわざわざ濡らすインドネシア人はいないし、ベッドのシーツをわざわざ濡らしてから敷くインドネシア人もいない。昔から、公衆トイレの床も便座もびしょ濡れなのはインドネシア人がそれを綺麗で清潔だと思っているからだ、と外国人がよく語っていた。中には、掃除人が作業を確かに行ったことを証明するためにびしょ濡れにするのだと語る外国人もいた。この現象の由来を論理的に解説してある情報をネット内で探してみたが、得られるものはなかった。ただひとつ、インドネシアのそのトイレ掃除方式はオランダ時代の標準スタイルが伝統と化したものだという解説がわたしの関心を引いた。オランダ本国の古い時代のトイレはおしゃがみスタイルだったそうで、便器の縁の水濡れ(それが後の時代に水濡れ便座になったのかも)はかえって清潔感を抱かせるものだったのかもしれない。インドネシアのトイレを見て、「インドネシア人が・・・」と考えたところに外国人の浅慮があったのではあるまいか<sup>42</sup>。[ 完 ]

修正 2023/11/21

---

<sup>42</sup> トイレがびちょびちょなのはインドネシアのみならず、中国や東南アジア諸国も同様だ。用便後に紙で拭くかあるいは拭かない人たちの国のトイレはびちょびちょではない。